

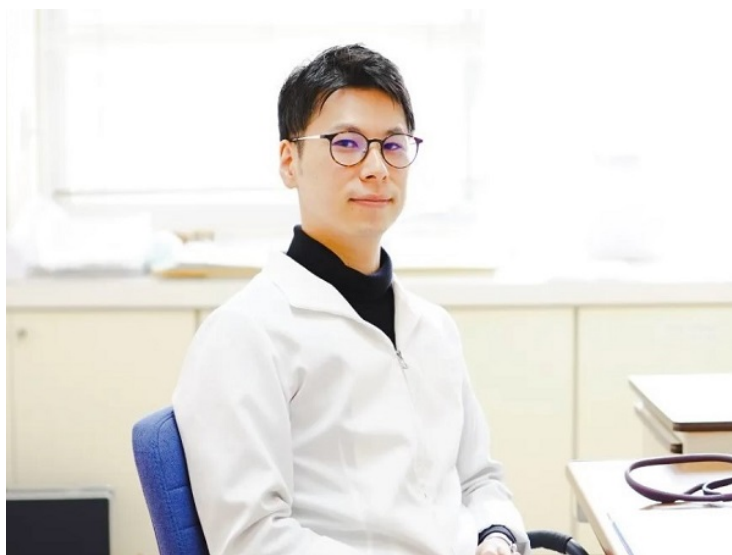
【千葉】「活動の一步を踏み出せる器に」30代医師が創業108年の診療所を承継した理由-森徳郎・大多和医院院長に聞く◆Vol.1

2023年4月14日（金）配信 m3.com地域版

「これは、いろんなことができそうだ」。敷地面積は8500平方メートル。サッカー場より広いその場所を訪れ、胸を高鳴らせた30代の医師がいた。へき地医療や海外支援に携わった森徳郎氏は創業108年の「大多和医院」（長生郡白子町）を2021年に承継し、町内初となる在宅医療を始め、地域活動も展開。2023年2月には町と連携協定を結んだ。「私たちの目線ははるか先にある」。目的は地域貢献だけではないというが――。（2023年3月10日オンラインインタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回は[こちら](#)

▼第3回は[こちら](#)



森徳郎氏（クリニック提供）

――まずは、クリニックの人的体制と患者数について教えてください。

スタッフは30人ほどで、医師は常勤の私と非常勤が9人、看護師が7人、事務が8人いるほか、平日午前には患者さんの無料送迎を行っているのを担う運転手、土地建物が広いので施設管理スタッフもいます。当院は医療だけでなく社会的な事業も行っているため、クリエイティブ職など医療以外のスキルを持つ人もいます。常勤医は2023年4月に1人加わり、2人体制になる予定です。

1日の外来患者数は発熱外来を行っているため変動しますが、少ない日は80人ほど、多い日は180人ほど。白子町は面積27.5平方キロメートル、人口1万640人（2023年3月1日現在）の小さな町である一方、車で移動する人が多く診療圏が都会に比べて広いので、隣接自治体からも患者さんが訪れます。在宅患者さんは70人ほどで、約8割は居宅の方です。

――ホームページに載っている写真を見ると、敷地が広そうですね。

敷地はとても広く、8500平方メートルほどあります。FIFA（国際サッカー連盟）が推奨するサッカーコートのサイズが7140平方メートルなので、「サッカー場より一回り大きい」と言えばイメージしやすいのではないのでしょうか。

こうした特性を生かして、2022年から地域に向けた活動も行っています。毎週水曜日に屋外にテントを設けてテーブルとイスを置き、パンとコーヒーを販売する「テントカフェ」を開いているほか、子ども向けのイベントも定期的に行っています。「ひまわりいっぱいプロジェクト」では、地域の人に伸びていた敷地の草を刈ってもらって整備

し、そこに子どもたちがひまわりの種を植えました。「サマースクール」では、家具作り体験やiPadを使ったデジタルの自己紹介カード作成、院内を使ったかくれんぼも。

直近では3月25日にアスレチックトレーナーによるスポーツイベントを開き、4月からは千葉県東金市で教育事業を行うNPO法人と協力し、院内の空きスペースを使って子どもの学習支援も始める予定です。将来的には遊具などを備えた公園を作る構想もあります。



同院の敷地で行われた「ひまわりいっぱいプロジェクト」(クリニック提供)

——大多和医院は100年以上の歴史があるといいます。他方、森先生は2010年の大学卒後からへき地医療や海外ボランティアなどに携わり、2021年9月に同院を事業承継しました。なぜ、地方のクリニックを引き継ごうと考えたのですか。

いろいろな人が集まって活動の第一歩を踏み出せる。そんな社会の「器」をつくりたいからです。

私は2010年に北里大学医学部を卒業後、横須賀市立うわまち病院で初期・後期研修を受けました。同院は地域医療を支援する「地域医療振興協会」が運営しており、私も後期研修中は総合内科に在籍する傍ら、年に3カ月は離島などの医療過疎地で診療しました。

海外ボランティアに携わったのは2016年です。東南アジアのミャンマー、カンボジア、ラオスで医療支援などを行う認定NPO法人「ジャパンハート」の活動を1週間体験し、そのときに医師が足りない状況を知って病院を辞め、2017年に参画しました。以後、これらの国で診療や病院のマネジメント、医療事業の統括を担いました（『海外で医療「最初の戸惑いはコスト意識の差」—国際医療NGO「ジャパンハート」海外医療統括医師・森徳郎氏に聞く

◆Vol.1』を参照）。



ミャンマーでの診療の様子(クリニック提供)

——海外での活動がクリニックの承継・運営に関係していると。

そうですね。大多和医院を拠点に町づくりを進めて地域に貢献し、またその経験を生かして将来的には海外でも支援活動をしたい思いがあります。

私が「器」を意識しているのは、ジャパンハートで知った医療におけるコストパフォーマンスの重要性が関わります。日本は国民皆保険制度が整っているので実感しづらいと思うのですが、寄付で活動資金の多くを賄い、無償で医療提供しているジャパンハートではコスパを常に意識する必要がありました。限られた資金と資材で多くの患者さんに医療提供するためには、検査や治療を選択するたび、「このコストを支払う価値が本当にあるのか」考えなくてはなりません。これは翻って、「お金があると助けられる人がいる」という海外の状況を示唆します。

ジャパンハートだけでなく、途上国支援などを志すNPO法人には崇高な思いを持つ人がたくさんいます。しかし、経済的な基盤が弱い場合、自立するまで事業を進められないケースもあるのが現実です。打開策として寄付を募るのは一つの方法ですが、それだけでなく、器があれば違うのではないのでしょうか。「土地と建物があり、そこに世代を問わずさまざまな人が集まって経済も回る状況であれば、思いやアイデアのある人が自分の特性を生かした活動をそこで行え、自立できる足場になれるかもしれない」。そんなふうを考えるようになったのです。

——なるほど、将来的なビジョンがあつてのクリニック運営だと。過去の取材記事によると、マッチングサイトで大多和医院を見つけたとか。

大手人材会社が運営する事業承継の仲介サイトで見つけました。実は、最初にクリックして概要をのぞいたのが大多和医院だったんです。その時点で詳細は分かりませんでしたが、土地がとて広い印象で、「これはいろんなことができそうだな」とピンと来るものがありました。詳しくは後で知りましたが、大多和医院は1915年（大正4年）に開院した歴史ある診療所で、初代院長はりんご病（伝染性紅斑）を日本で初めて発見した同町出身の医師、大多和与四郎氏が務めました。

その後は大多和家が家業を継いでいましたが、私の承継前は東京に住む親族がこちらに来てなんとか回していた状況で、安定して運営を担える医師を探していたそうです。振り返ると、へき地や海外での活動もそうだったと思うのですが、私は自分の価値が最大化される環境で働きたいタイプ。承継してから徐々に町づくりや海外支援など展望の輪郭が浮かんできました。



創業108年を迎える同院の外観（クリニック提供）

◆森 徳郎（もり・とくろう）氏

2010年北里大学医学部卒。横須賀市立うわまち病院での勤務後、2017年に東南アジアで医療支援などを行う認定NPO法人「ジャパンハート」に加入。海外で診療や病院マネジメント、医療事業統括を担い、2021年に千葉県長生郡白子町にある「大多和医院」を承継。日本内科学会総合内科専門医。

記事検索

ニュース・医療維新を検索

